ガッサン・アブ＝シッタ博士の演説

「明日はパレスチナの日」

「各世代は、相対的に不透明な中で、自らの使命を発見し、それを果たし、あるいは裏切らなければならない。－ フランツ・ファノン『惨めな大地』

グラスゴー大学の学生たちは、殺害された 52,000 人のパレスチナ人を追悼して投票することを決めた。殺された 14,000 人の子どもたちを偲んで。孤児となった 17,000 人のパレスチナの子どもたち、負傷した 70,000 人（そのうちの 50％は子どもたち）、手足を切断された 4～5,000 人の子どもたちとの連帯のために投票した。

彼らは、破壊された 360 の学校と完全に平らにされた 12 の大学の生徒と教師との連帯に投票した。グラスゴー大学の卒業生で、赤ん坊と一緒に殺害されたディマ・アルハジの家族と、彼女の家族全員の記憶に連帯した。

20 世紀初頭、レーニンは、西欧における真の革命的変革は、帝国主義や奴隷植民地に対する解放運動との緊密な接触にかかっていると予言した。グラスゴー大学の学生たちは、政治が非人間的なものになることを許せば、私たちが何を失うことになるかを理解していた。彼らはまた、ガザについて重要でかつ異っているのは、グローバル資本が余剰人口の管理を検討している実験室であることも理解している。

彼らがガザの隣に立ち、ガザの人々と連帯したのは、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相が今日使う武器は、インドのナレンドラ・モディ首相が明日使う武器であることを理解していたからだ。狙撃銃を装備したクアッドコプターやドローンは、ガザで非常に巧妙かつ効率的に使用され、ある夜、アル・アハリ病院では、これらの発明品によって 30 人以上の負傷した市民が病院の外で撃たれた。いずれは、イスラエルが開発した顔認識ソフトのように、イースターハウスやスプリングバーンにも導入されるだろう。

では実際、学生たちは誰に投票したのだろうか？　私の名前はガッサン・ソリエマン・フサイン・ダハシャン・サカー・ダハシャン・アーメド・マフムード・アブ・シッタ。私を除いて、私の父と先祖は全員、グラスゴー大学の前学長の一人が手放したパレスチナで生まれた。彼の 46 文字の宣言が、イギリス政府によるパレスチナ入植者の植民地化支援を発表する 30 年前、アーサー・バルフォアはグラスゴー大学の学長に任命されていた。「世界を調査してみると……膨大な数の未開人社会が存在することがわかるが、それは明らかに、有史以前の人間の間に広まっていたものと大差ない文化段階にある」と、バルフォアは 1891 年の学長就任演説で述べた。

その 16 年後、この反ユダヤ主義者は、東ヨーロッパのポグロムから逃れてきたユダヤ人が英国で安全に過ごせるようにするため、1905 年の外国人法を巧みに立案した。1920 年、私の祖父シェイク・フセインは、私の家族が住んでいた小さな村に私財を投じて学校を建てた。そこで彼は、教育を私の家族の生活の中心に据える関係の礎を築いた。1948 年 5 月 15 日、ハガナ軍はその村を民族浄化し、何世代にもわたってその土地に住んでいた私の家族を、今ではガザ地区の廃墟と化したハン・ユニスの難民キャンプへと追いやった。祖父の家に侵入したハガナ将校の手記を叔父が見つけた。その手記の中で、その将校は、家が本であふれ、祖父のものであるカイロ大学の法学部の学位証明書があったことを信じられない思いで記している。

ナクバの翌年、父はカイロ大学の医学部を卒業し、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の新設クリニックで働くためにガザに戻った。しかし、同世代の多くの人々と同じように、父も湾岸諸国へ移り住み、それらの国々の保健システムの構築に貢献した。1963 年、小児科の卒後研修を受けるためにグラスゴーに来た彼は、この街と人々に恋をした。

そして 1988 年、私はグラスゴー大学で医学を学ぶことになった。ここで私は、医学には何ができるのか、医学のキャリアがいかに人々の生活に冷たい視線を向けることになるのか、また、正しい政治的、社会学的、経済的なレンズを身につければ、人々の生活がいかに自分たちの力ではどうにもならない政治的な力によって形作られ、何度も歪められているのかを理解することができるのかを知った。

そしてグラスゴーで、私は初めて国際連帯の意味を知った。当時のグラスゴーには、エルサルバドル、ニカラグア、パレスチナとの連帯を組織するグループがあふれていた。グラスゴー市議会は、ヨルダン川西岸地区の都市と連帯した最初の都市のひとつであり、グラスゴー大学は、サブラとシャティーラの虐殺の犠牲者のために最初の奨学金を設立した。私の戦争外科医としての旅が始まったのは、本当にグラスゴーでの数年間のことだった。最初は学生として、1991 年のアメリカによる最初のイラク戦争に行き、1993 年にはマイク・ホームズと南レバノンに行き、第 2 次インティファーダの最中に妻とガザに行き、2009 年、2012 年、2014 年、そして 2021 年にイスラエルがガザで起こした戦争に行き、イラク北部のモスルでの戦争に行き、シリア戦争の最中にダマスカスに行き、イエメン戦争に行った。しかし、私がガザに行き、大虐殺が繰り広げられるのを見たのは、10 月 9 日のことだった。

私が戦争について知っていたことのすべてが、これまで見たことのない 10 月 9 日の事態と比較された。それは洪水と津波の違いだった。私は 43 日間、殺戮マシーンがガザ地区のパレスチナ人の命と身体を引き裂くのを見た。カミングアウト後、グラスゴー大学の学生たちは私に学長選挙に立候補するよう声をかけてくれた。その直後、バルフォアの野蛮人の一人が当選した。

では、この 6 ヵ月間、私たちはジェノサイドから、そしてジェノサイドについて、何を学んだのだろうか？
私たちは、インフラも人材も含めた教育機関全体の抹殺である学徒虐殺が、民族の大量虐殺的抹殺の重要な要素であることを学んだ。ガザでは 12 の大学が完全に破壊された。400 の学校。6,000 人の学生が殺された。230 人の教師が殺された。100 人の教授と学部長、2 人の大学学長が殺された。

また、これは私がガザを離れたときに知ったことだが、大量虐殺計画は氷山のようなもので、イスラエルはその一角にすぎない。氷山の残りの部分は、ジェノサイドの枢軸で構成されている。この大量虐殺の枢軸とは、アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストラリア、カナダ、フランス……イスラエルを武器で支援し、大量虐殺を武器で支援し続け、大量虐殺プロジェクトを継続させるために政治的支援を維持してきた国々である。大量虐殺を人道化しようとするアメリカの企てに騙されてはならない:彼らは パラシュートで食糧援助を投下しながら人々を殺すのだ。

私はまた、大量殺戮の氷山の一角に、大量殺戮を可能にする人々がいることを知った。男女を問わず、生活のあらゆる場面、あらゆる機関にいる小さな人々である。これらの大量虐殺を可能にする人々には、3 つのタイプがある。

1. 第一は、パレスチナ人の人種化と完全な他者化によって、殺された 1 万 4 千人の子どもたちに対して何も感じることができず、何も悲しむことのできない存在であり続けている人々である。イスラエルが 14,000 匹の子犬や子猫を殺したとしたら、彼らはその蛮行によって完全に破壊されていただろう。

2. 第二のグループは、ハンナ・アーレントが『悪の凡庸性』の中で、「個人的な出世のために並外れた勤勉さを発揮した以外は、まったく動機がなかった 」と述べた人々である。

3. 第三は無気力な人々である。アーレントが言ったように、「悪は無関心の上に栄え、無関心なしでは存在できない」。

第一次世界大戦が始まった翌年の 1915 年 4 月、ローザ・ルクセンブルクはドイツのブルジョア社会についてこう書いている。「蹂躙され、汚され、血にまみれ……ひどく飢えた獣であり、無秩序の魔女の安息日であり、文化と人類にとっての疫病である」。戦争兵器が意図的に子どもの身体に何をもたらすかを見、嗅ぎ、聞いたことのある私たち、傷ついた子どもたちの手足を切断したことのある私たちは、こうした残虐非道な道具の製造、設計、販売に携わるすべての人々に対して、最大限の軽蔑の念を抱くほかはない。兵器製造の目的は、生命を破壊し、自然を荒廃させることである。兵器産業では、戦争によって、あるいは戦争によって獲得した資源の結果として利益が上がるだけでなく、人間も環境も含めたすべての生命を破壊するプロセスを通じて利益が上がる。資本が戦争によって成長する一方で、平和や汚染されていない世界が存在するという考えは馬鹿げている。武器貿易も化石燃料貿易も、大学にはふさわしくない。

では、この 「野蛮人 」とその共犯者である私たちの計画は？

国際司法裁判所が「これは虐殺戦争である」というもっともらしい判決を下したこと、そして現在、ニカラグアがジェノサイドに加担したとしてドイツを提訴していることを受け、大学のリスクを回避するために、私たちは武器製造と化石燃料産業からのダイベストメントを求めるキャンペーンを行う。

戦争中にこれらの株式から利益として得た大量虐殺の血税は、パレスチナの学術機関の再建を支援する基金の設立に使われる。この基金は、ディマ・アルハジの名で、この大量虐殺によって絶たれた人生を記念して設立される。

私たちは、グラスゴー大学をジェンダーに基づく暴力のないキャンパスにするために、学生団体や市民社会団体、労働組合の連合体を結成する。

私たちは、グラスゴー大学の学生の貧困をなくし、すべての学生に手頃な価格の住居を提供するための具体的な解決策を見つけるためのキャンペーンを行う。

私たちは、アパルトヘイトやパレスチナ人に対する教育の否定に加担してきたイスラエルから、ジェノサイドや生命の否定にまで発展したイスラエルのすべての学術機関に対するボイコット運動を行う。私たちは、反シオニズムと反イスラエルの大量虐殺的入植者植民地主義を反ユダヤ主義と混同しない、反ユダヤ主義の新たな定義を求める運動を展開する。

私たちは、ユダヤ人社会、ローマ人社会、イスラム教徒、黒人、その他すべての人種差別された集団を含む、すべての異質な、人種差別されたコミュニティとともに、パレスチナ人抹殺への支援と引き換えに、イスラエル政府によって反ユダヤ主義の根源を免罪された右翼ファシズムの台頭という共通の敵に立ち向う。

つい今週、ドイツ政府出資の機関が、パレスチナ人への支援を理由に、ユダヤ系知識人であり哲学者であるナンシー・フレイザーを問責したのを見たばかりだ。1年以上前には、労働党がユダヤ人の反シオニスト運動家であるモシェ・マチョーバーを反ユダヤ主義で停職処分にしたのを見た。

行きの飛行機で、私は幸運にもリンジー・ストーンブリッジの『We Are Free to Change the World』を読んでいた。この本から引用しよう：「無力感が最も強いとき、歴史が最も暗澹たるものに思えるときこそ、人間らしく、創造的に、勇気をもって、複雑に考えようとする決意が最も重要なのだ」。90年前、ベルトルト・ブレヒトは『連帯の歌』の中で、「明日は誰のものか？　そして世界は誰の世界なのか？」と書いた。

さて、彼への、あなたへの、そしてグラスゴー大学の学生たちへの私の答えだ：戦うべきは君たちの世界だ。君たちの明日を作るのは君たちだ。私たちにとって、そして私たち全員にとって、大量殺戮の抹消に対する抵抗の一端は、ガザの明日について語り、ガザの傷を癒すための明日の計画を立てることなのだ。私たちは明日を自分のものにする。明日はパレスチナの日だ。

1984年、マーガレット・サッチャーとロナルド・レーガンの支援を受けたP・W・ボッタによる残虐なアパルトヘイト政権下の暗黒の時代に、グラスゴー大学がウィニー・マンデラを学長としたとき、40年後の南アフリカの男女が、自由な国家の自由な市民としてのパレスチナ人の生きる権利を守るために、国際司法裁判所の前に立つことになろうとは、誰も夢にも思わなかっただろう。

このジェノサイドの狙いのひとつは、私たちを自らの悲しみに溺れさせることだ。個人的なことだが、私と私の家族が愛する人のために悲しむことができるよう、スペースを確保したい。私たちの愛するアブデルミニムの記憶に捧げる。私の同僚であるミッドハット・サイダム博士の思い出に捧げる。彼は、妹が子供たちと安全に暮らせるようにと、妹を家まで送るために 30 分ほど外出し、そのまま帰らぬ人となってしまった。私の友人であり同僚でもあるアフマド・マカドメ博士に捧げる。彼は 10 日あまり前、シファ病院で妻とともにイスラエル軍によって処刑された。いつも笑顔で肩を叩いてくれたシファ病院救急部長のハイサム・アブ・ハニ医師に捧げる。そして何よりも、私たちの土地に捧げる。常に存在するマフムード・ダルウィッシュの言葉を借りよう、

「私たちの土地へ、それは戦争の勝者のものであり、憧れと火傷で死ぬ自由であり、私たちの土地は、その血塗られた夜の中で、遥か彼方のために煌めき、その外にあるものを照らす宝石である…。私たちはといえば、その内側にある、われわれはもっとあえぐ！」

そして、私は希望で終わりたい。不滅のボビー・サンズ議員の言葉を借りれば、「我々の復讐は、我々の子どもたちの笑いである」。

HASTA LA VICTORIA SIEMPRE！

（絶え間なく勝利に向かって！）